

SpaceX上場初日の動きと今後の注目点

上席主任研究員 阿部 賢介

注目されたSpaceXの新規公開株式（IPO）後初日は、終始公開価格及び初値を上回る動きで取引を終えた。IPO前から期待が先行し、かつ浮動株比率が約4%と低いことで非常にタイトな需給バランスが値を押し上げた。

IPO前の状況：SpaceXは想定企業評価額を1.77兆ドルとして、総株式の約4.2%を売却し750億ドルを調達する目論見を立てていた（引受証券会社のオプションとして最大860億ドル）。同社は宇宙、通信、AIをコア事業として、前者2事業を土台に太陽光発電を利用した軌道上の宇宙データセンター（DC）建設など、AIインフラを建設する計画を示した。IPO主幹事のゴールドマン・サックスは、AI事業売上が2030年に3,220億ドルと2025年の約10倍になり、売上全体では4,740億ドルになると予想。他方、金融サービス企業のモーニングスターは、同社の計画が目論見通りに実現する可能性は7%として、適正価格を公開価格135ドル/株の47%にあたる63ドル/株と試算していた。

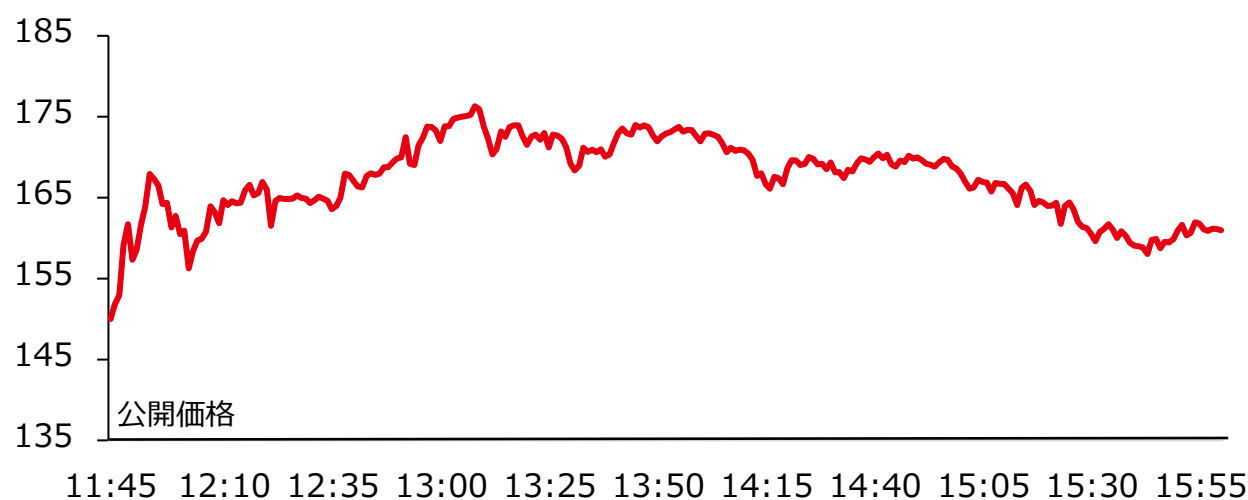
上場初日の動き：注目の初値がついたのは取引開始から2時間超経過した午前11時50分頃。公開価格135ドルを11%上回る150ドルとなり、13時頃には最高値となる176.52ドルをつけた。ただその後は値を下げていき、終値は160.95ドルと初値対比騰落率は7.3%となった。引けにかけ利益確定とみられる動きはあったものの、ナスダック全体の騰落率（0.31%）は大きく上回った。また回転率（新規発行株数に対する出来高）は93%と決して高くはなく、通常のIPOよりも個人投資家向け割り当てが多いとされていたが、目立った投機的な動きは見られなかった（個人投資家向け割合は、通常のIPOでは1割程度だが、SpaceXは3割程度を想定）。

今後の注目点：SpaceX銘柄は7月初めまでに、MSCIやナスダック100など複数の株価指数に採用される可能性が高い。採用されれば、これら指数との連動を商品性とする「パッシブ型」投資ファンドが、連動性維持のためSpaceX株を購入することになる。MSCI指数連動の上場投資信託だけでも運用資産額が2兆ドル超あり、まとまった資金が移動する可能性がある。他方、IPO銘柄はロックアップ（LU、IPO前の既存株主による株式売却禁止期間。180日間が通例）の解除後、浮動株の増加で株価が下落する傾向にある。例えばDC事業を手掛けるCoreWeaveは、2025年のナスダック市場で最大規模のIPOを行い、一時公開価格の4.7倍まで上昇。しかしLU解除後にはピークの半値まで下げ、それ以降は高値を更新していない。SpaceXの場合、LU解除は通常より早期に設定されているが、放出の上限が段階的に（*）定められているため、影響が見えにくくなる可能性はある。一方で、早ければ秋頃にアンソロピックとオープンAIが大型のIPOを行う可能性があり、AIモデル企業間での競争が意識されるだけでなく、AI関連株式の市場での荷もたれ感が急に高まる恐れはある。この展開のもとではAIバブル懸念や安全規制の強化などによる株価調整は大きくなり得るだろう。

SpaceXの事業進行についても注目する必要がある。同社は目論見書の中で、巨大な宇宙ロケットかつ輸送船であるスターシップの開発遅延を最初のリスクとして掲げている。スターシップは宇宙DC建設において重要な輸送ビークルであり、その開発はSpaceXの事業の行方を大きく左右する。これまで12回の飛行実験が行われており、IPO後初となる次回実験の注目度は高い。また目論見書では、2028年としていた宇宙DCの実証実験開始を、2027年末に前倒しすると発表しており、その実現性が今後問われていくことになるだろう。

*：LU対象の普通株式のうち、創業者マスク氏保有分（約40%）などを除く通常の既存株主保有分のLU解除は以下の通り。
 IPO後最初の四半期決算（8月頃）2営業日後に最大20%（決算日前10営業日のうち最低5日間の終値が公開価格を30%上回っていれば追加で10%）
 ; IPO70日、90日、105日、120日、135日後に、それぞれ最大7%；2回目の四半期決算（11～12月頃）後に最大28%；IPO180日後に全保有分

(\$/株) ▽上場初日の動きと他テック企業IPOとの比較



(出所) LSEGなどから丸紅経済研究所作成

▽今後の注目点

想定時期	内容
6月末頃まで	FTSEラッセル指数、MSCI指数、モーニングスターCRSP指数に採用
7月初頃	ナスダック100銘柄に採用
8月頃	最初のLU解除
早くて秋頃	アンソロピックなどのIPO
12月中旬	マスク氏保有分などを除きLU全解除
27年末まで	最初の宇宙DC実証実験開始

(出所) SpaceX目論見書、各種報道などから丸紅経済研究所作成

(執筆者プロフィール)

阿部 賢介 (Kensuke Abe)

abe-k@marubeni.com

上席主任研究員

研究分野：米国、中南米、中東・アフリカ全般

2005年から08年三菱商事（株）勤務。2010年に丸紅に入社し、金属部門を経て、2016年に丸紅経済研究所。2016年から17年米国・戦略国際問題研究所（CSIS）出向。2021年から26年まで丸紅米国会社ワシントン事務所勤務。2026年から現職。神戸大学国際文化学部卒、台湾・国立政治大学台湾史研究所修了。

株式会社丸紅経済研究所

〒100-8088 東京都千代田区大手町一丁目4番2号

<https://www.marubeni.com/jp/research/>

(免責事項)

- 本資料は公開情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性、相当性、完全性を保証するものではありません。
- 本資料に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰属するもので、当社は何らの責任を負うものではありません。
- 本資料に掲載している内容は予告なしに変更することがあります。